都市の緑3表彰

緑がつなぐ町・人・暮らし

一般財団法人第一生命財団では、公益財団法人都市緑化機構と共に、「緑の環境プラン大賞」（共催）、「緑の都市賞」「屋上・壁面緑化技術コンクール」（いずれも特別協賛）の、「都市の緑3表彰」に取り組んでいる。これらは、都市緑化を通じ、環境保全、ヒートアイランドの抑止、二酸化炭素の削減、緑のまちづくりや植栽活動を通じたコミュニティの形成などに貢献する事業を支援、顕彰するもので、全国各地で、すでに多くの取り組みが実績をあげている。これらに選出された事業のなかから、とくに都市環境の向上やまちづくりに資する事例を取材。今回は、2022年度「第42回 緑の都市賞 内閣総理大臣賞」を受賞した熊本市、同年「第21回 屋上・壁面緑化技術コンクール 国土交通大臣賞」を受賞したJR熊本駅ビルを紹介する。

取材・文:**斎藤夕子** photo:**坂本政十賜**

第42回 熊本県熊本市 持続可能な「森の都」の大展開

緑の都市賞 内閣総理大臣賞：緑のまちづくり部門

2005年に「熊本市緑の基本計画」を策定、推進してきた熊本市では、2021年、この間の社会情勢の変化と、これまでの取り組み成果を踏まえ、「持続可能な〈森の都〉の実現」を掲げ、これを改定。市内の緑化率を高めるだけでなく、産官学民連携による緑やオープンスペースの維持管理の仕組みづくりも含め、緑の「質」を高めることに取り組み始めている。

今回、熊本市の「緑の都市賞」受賞は、市域全体でさまざまに展開している取り組みの成果が総合的に評価されたものだ。そのなかでも、とくに行政と市民、企業との協働で展開しているいくつかの取り組みを紹介していく。

●通町筋のビルから眺める軌道緑化と熊本城

市電軌道敷緑化事業

市電・通町筋駅近くの商業ビル3階のテラスから熊本城を望むと、まさに「森の都」と感じられる、緑豊かな眺望が広がっていた。街と熊本城が緑でつながれたように感じられるのは、市電の軌道が芝生に覆われているからだ。2009年から2021年に実施してきた市電軌道敷緑化事業では、中心市街地や熊本駅周辺を中心に総延長989m、総面積4615㎡を芝生敷とした（熊本市電の路線長は約12km）。軌道の緑化は景観だけではなく、騒音の低減、ヒートアイランド対策にも効果が認められている。さらに、芝生の維持管理費用に対しては「市電緑のじゅうたんサポーター制度」を創設し、事業への賛同者から寄付を募り、これに充てている。2022年3月までに寄付金総額は約700万円。この他、旅行中にサポーター制度に気付いた人が、市役所まで寄付金を持参してくれたこともあったそうだ。

スポンサー花壇

市電・辛島町駅前の交差点には、アナベルやアリウム、セージ、ガウラ、ルエリアなどが混植された花壇が設けられている。2022年に開催された「くまもと花とみどりの博覧会（花博）」の開催決定を契機に始まった「NEO GREEN PROJECT（花と緑のまちづくり）」の一環として整備された「スポンサー花壇」の一つだ。企業から協賛金を募り、花壇の整備・運営を行うというもので、沿道16カ所に同様の花壇が設けられている。ここ、辛島町の花壇のある場所にはもともと駐輪場があり、道路との境界には目隠しとしてキンモクセイとアジサイが植えられていたが、駐輪場が移転。これに伴い、植栽部分もコンクリート舗装される案もあったが、花博開催を視野に、2020年、新たな花壇として整備された。これに尽力したのが、市内在住で国際的に活動するガーデナーの永村裕子さんだ。花苗を植え替える費用と手間がかからず、四季折々にナチュラルな趣を見せる宿根草を中心とした花壇としてプランを構成。日常的な手入れを担うボランティアグループ「ゆるっとナ☆ガーデナーズ」も組織した。メンバーは毎週末の夕方に自主的に「ゆるっと」集まり、植栽の手入れを行っているという。

左●季節ごとの彩りを見せる「スポンサー花壇」
上●3年目を迎えた現在、宿根草が根付き、安定した美しさを誇るようになった

ただ、宿根草の花壇は花苗の植え替えをしない代わりに、手入れをしながら時間をかけて育てていく必要がある。宿根草の中には冬季に地表面は枯れ、根を育てるものもある。とくに1、2年目は、枯れた花壇を放置しているように見える状況があり、市民からの苦情や、離れていったスポンサーもあったようだ。それが花壇の造成から3年目となった現在、植栽も根付き、季節ごとに安定した美しさを見せるようになった。サステナブルな花壇としての本領を発揮し始めている。

くまもとオープンガーデン

サクラが咲き、春の花が咲き揃ってくる3月後半から5月の後半にかけての約2カ月間、市内全域で「くまもとオープンガーデン」が開催されている。個人の庭やお店や企業、学校などの敷地内の花壇を公開し、来場者に巡ってもらおうという取り組みで、第3回目となる2023年には、41件がこれに登録した。オープンガーデンには統一のサインボードが設置される他、市が地図と写真付きのパンフレットを作成。個人のお宅の場合には、事前予約が必要なケースもある（パンフレットにはその旨明記されている）が、街巡りを楽しみながら、丹精された庭の花々を鑑賞することができる。今回は、数種類のつるバラが屋外テラスを彩る河島さんのお宅と、四季折々に花をつけるさまざまな草花をバランスよく混植した須田さんのお宅を訪ねた。須田さんは以前から、庭の草花をInstagramに投稿しており、フォロワーは1.1万人を数え、全国にファンがいるという。お二方とも、オープンガーデンの取り組みは、庭づくりの励みになり、訪ねて来られる方々との交流を楽しんでいると笑顔で教えてくれた。庭づくりという個人的な楽しみが、熊本市の魅力向上にもつながっている。

江津湖「ON THE PARK」

緑のまちづくりにおける産官学民の取り組みの一つとして、熊本市水前寺江津湖公園内をフィールドに積極的な活動を展開しているのが「くまもと江津湖魅力化推進協議会」だ。地元企業および地域住民らによって2017年に発足した同協議会は、熊本地震の経験から、自分たちの街をもっと元気に、地震前よりも魅力的な街にしようと、交流イベントなどを主催。2018年5月、江津湖のほとりで、マルシェや音楽ライブ、ライブペインティングなどを開催した「江津湖Living」には、地域内外から300～400名の参加者が集い、賑わいを見せた。「江津湖Living」は、その後、5月と10月（第2回目は2018年11月。また2020年および2021年の5月はコロナ禍を受け中止）の年2回のペースで開催され、今年の5月で第8回目を数えた。この他にも、随時、防災キャンプや江津湖のお掃除イベント、屋外シネマなどを開催している。

さらに、こうしたイベントを街の「日常」にしようと、江津湖のアクティビティ拠点として、2022年3月「ON THE PARK」をオープン。都市公園法第5条にもとづく設置管理許可制度を利用した民間の施設として、公園の

左●自作のピザ窯もある庭に、つるバラが映える河島邸のオープンガーデン
右●年間を通じてさまざまな花が咲く、須田邸のオープンガーデン。SNSを通じて全国にファンをもつ

上●江津湖のアクティビティ拠点として設けられた「ON THE PARK」
右●訪れる人々が「リビング」のようにくつろげるような場として誕生した

魅力向上や利便性・機能性の向上に資する活動に取り組んでいる。開業時から約1年間は、実験的にグランピング施設を設け、公園内での宿泊体験なども提供してきた。2023年7月からはこれまでの経験を踏まえ、街のオアシスとしての江津湖の魅力をより広く、深く、満喫してもらえる事業を新たに展開していくという。

駆け足で見てきた熊本市の緑のまちづくりだが、それぞれの取り組みからは、市民や事業者による、自分たちが暮らし、働く街をより楽しく、魅力的にしたという自発的な活動に対し、行政が連携、サポートしながら進めていることが伝わってきた。

【取材協力】
熊本市都市建設局森の都推進部
　みどり政策課 課長・長和史さん
　みどり公園課 副課長・田尻一誠さん
　花とみどり協働課 副課長・永野康裕さん
タビネコ ランドスケープ・永村裕子さん
オープンガーデン「手作りのお庭」・河島茂生さん
オープンガーデン「季節を感じる庭」・須田文代さん
くまもと江津湖魅力化推進協議会代表・田中誠一さん